

# 雷のさずけもの

楠山正雄

青空文庫



むかし、おわりのくに尾張国ひとりに一人のお百ひやくしやう姓あつがありました。ある暑い  
なつ夏の日にお百ひやくしやう姓あつは田の水みづを見みに回まわつていますと、急きゆうにそこら  
 が暗くらくなつて、真まつ黒くろな雲くもが出てきました。するうち雲くもの中から  
 ぴかりぴかり稲妻いなずまがはしり出だして、はげしい雷かみなりがごろごろ鳴なり  
 出だしました。やがてひどい大夕立おおゆうだちになりました。お百ひやくしやう姓あつは  
 「桑原くわばら、桑原くわばら。」と唱となえながら、頭あたまをかかえて一本ほんの大きな  
 木の下こに逃にげ込こんで、夕立ゆうだちの通とおりすぎるのを待まっていました。  
 すると間まもなく、がらがらツと、天てんも地ちもいつしよに崩くずれ落おちた

かと思おもうようおもなおもすおもさまじいおも音おとがおもしまおもした。お百ひやくしよう姓おもはおも思おもわおもずおも耳みみをおも押おさおもえて、地ちの上おもにつおもつおも伏ふしまおもした。

しばおもらくおもしてこおもわおもごおもわおも起おきおも上あがおもつおもておもみおもまおもすおもと、つおもいおも五おも六おも間けん先さきにおも大おもきおもなおも光ひかりおも物ものがおもこおもろおもげおもておもいおもまおもしおもた。お百ひやくしよう姓おもはおもふおもしおもぎおもにおも思おもつおもて、そおもつおもとおもそおもばおもにおも寄よつおもておもみおもまおもすおもと、そおもれおもはおも奇き妙みょうなおも顔かおをおもしおもて、髪かみのおも毛けのおも逆さか立だつおもた、体からだのおも真まつおも赤かなおも、子こ供どものおもよおもうおもなおも形かたちのおももおもでおもしおもた。

こおもれおもはおも雷かみなりがおもあおもんおもまおもりおも調ちようし子のにおも乗のつおもて、雲くもの上おもをおも駆かけおも回まわるおもひおもよおもうおもしおもに、足あしをおも踏ふみおもはおもずおもして、地ちの上おもにおも落おちおもて、目まわをおも回まわしおもたおものでおもしおもた。  
お百ひやくしよう姓おもは、

「はおもはおもあ、なおもるおもほおもど、こおもれおもがおも話はなしにおも聞きいたおも雷かみなりかおもな。何なんだ、こおもんおもなおもちおもつおもぽおもけおもな、子こ供どもみおもたおもいおもなおもものおもなおもか。」

と思おもいながら、半はんぶん分ぶんは気き味みが悪わるいので、いきなり鋏くわを振ふり上あげて、打うち殺ころそうとしますと、雷かみなりは気きがついて、あわててお百ひやく姓しょうを止とめました。

「まあ、そんな乱らんぼう暴ぼうなまねをししないで下ください。つい雲くもを踏ふみははずして落おちてきただけで、何なにもあだをするのではありませせんから、どどうぞ勘かん弁べんして下ください。」

ここう雷かみなりははいいつて、手てを合あわせせました。お百ひやく姓しょうは、  
「雷かみなり、雷かみなりつて、どどんなにここわいものかと思おもつたら、一ひと度ど落おちると、  
かからかきし、いいくくじじののないものだ。」

と思おもつて、

「じやああかかわいわいそうそうだだかから助たすけてやる。だだががここんんどどかから落おちるこ

とはならないぞ。そのたんびにびっくりするからな。」

といつて、許ゆるしてやりました。

すると雷かみなりは大たいそうよろこんで、

「どうもありがとう。何かなにお礼れいをさし上げたいが、あいにく何もなに持つて来きませんでした。何でもほしい物ものがあつたらいつて下ください。空そらに帰かえつたら、きつとおくつて上げますから。」

といいました。

するとお百ひやく姓しょうはしばらく考かんえていましたが、

「さあ、何かなにほしい物ものといつたところで、このとおり体からだは丈夫じょうぶで、毎まい日にち三度どのごぜんを食たべて、働はたらいていれば、何なにも不足ふそくなことはないが、ただ一つ六十になつて、いまだに子こ供どもが一人ひとりもない。

これだけはいつも不足ふそくに思おもっている。」

と、いいますと、

「じやあさつそく子供こどもを一人ひとりさずけて上げあましょう。そのうちお前まえさんのおかみさんにふしぎな強つよい子が生うまれるでしょうから、それはわたしがおくつてあげたのだと思おもつて下ください。その代かわり一つお願ねがいがあります。どうぞくすのきで舟ふねをこしらえて、水みずをいっぱい入いれて、その中にささの葉はを浮うかべて下ください。」

と、いいました。

「何なんだ、そのくらいなことわけはない。その代かわりきつと子供こどもを頼たのみますよ。」

と、いって、お百ひやくしやう姓せいはさつそくくすのきをくりぬいて、舟ふねを

こしらえ、その中に水をいっぱいためて、ささの葉を浮かべました。雷はその舟に乗って、またすうつと空の上へ上がって行つてしまいました。

## 二

それから三月ほどたつと、おじいさんのおかみさんが急におなかが大きくなりました。そして間もなく男の赤んぼが生まれました。

その赤んぼは生まれた時から、ふしぎな子で、きれいな錦の小蛇が首のまわりに二巻き巻きついていました。そしてその頭とし



つぽの先は長く伸びて、赤んぼの背中であか  
せなか  
でつながっていました。

「さては雷が、約束のとおり子供をよこしてくれた。」

とお百 姓はいって、夫婦して大事に育てました。

この子が十三になった時、お百 姓は学問を仕込んでもら

おうと思つて、元興寺の和尚さんのお弟子にしました。

するとこの子は学問よりも大そう力が強くつて、お弟子に入

つたあくる日、自分の体の三倍もあるような大きな石をかかえて

ほうり出しますと、三尺も地びたがめり込んだので、和尚さん

はびっくりして、この子はただものでないと思ひました。

そのころこの元興寺の鐘撞堂に毎晩鬼が出て、鐘つきの

小僧をつかまえて食べるというので、夜になると、だれもこわが

つて鐘かねをつきに行くものがありません。それで長い間元興寺の鐘かねの音おとが絶たえていました。雷の子供こどもはその話はなしを聞いて、

「和尚おしょうさん、わたしを鐘かねつきにやつて下ください。」

といいました。和尚おしょうさんは大たいそうよろこんで、出だしてやりました。するとその晩ばん子供こどもが、一人鐘撞堂ひとりかねつきどうに上あがって鐘かねをつこうとしますと、どこからか鬼おにが出て来きて、うしろから頭あたまをつかまえました。子供こどもは、

「うるさい、何なにをするのだ。」

といったまま、かまわず撞しゅもく木もくに手をかけますと、その手をまた鬼おにがつかみました。子供こどもはおこつて、あべこべに鬼おにの頭あたまをつかみました。そしていきなり鬼おにの首くびを引き抜ひぬこうとしました。鬼おには

びつくりして、「これは驚いた、とんでもないやつが出てきた。」  
 と思つて、逃げ出そうとしました。けれど子供はしつかり鬼の頭  
 をつかまえていて放しません。鬼は苦しまぎれに子供の髪の毛を  
 つかんで、負けずにこれも首を引き抜こうと骨を折りました。ど  
 ちらも負けず劣らぬえらい力でしたから、えいやえいや、両  
 方で頭の引つ張りこをしているうちに、夜が明けかかつて、鶏  
 が鳴きました。すると、鬼はびつくりして、あわてて頭の皮をそ  
 っくり子供の手に残したまま、にげて行ってしまいました。  
 夜がすっかり明けはなれると、みんなが心配して見に来まし  
 た。そして子供がとくいらしく、髪の毛のついた鬼の頭の皮を振  
 り回すのを見て、ますますびつくりしました。

おに  
 鬼おにといいうのは、昔むかしこのお寺てらで悪わるいことをして殺ころされた坊ぼうさんが、  
 お墓はかの中なかから毎まい晩ばん出でて来くるのでした。しかしこのことがあつて  
 から、二度どと鬼おにの姿すがたを見みることがなくなりまました。そして鬼おにの残のこ  
 して行いつた頭あたまの皮かわは、元興寺がんこうじの宝たから物ものとして残のこつたさうです。

# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月19日作成

2004年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 雷のさずけもの

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>